

## 文化 エンタメ

中学時代の同級生が最近、故郷福岡から上京した。約30年ぶりの再会で祝杯をあげた夜、ある記事について専門の医師としての意見を聞いた。

月刊「宝島」(8月号)の企画『2人に1人ががんになる』は本当なのか?。その中のインタビューで慶応大病院放射線治療科の近藤誠医師は、がん患者への余命3カ月宣告を「全部ウソ」と論じる。

同氏は余命宣告が「患者を脅して治療に追いこむため」のものであり、特に「3カ月」は、治療の末に早く亡くなっても「手遅れだったから仕方ない」と遺族が納得し、逆に長く生きたら感謝する絶妙な数字と訴える。

外科医として3千人以上のがん患者を診た同級生は首を横に振る。「がんを治療しない患者」150人以上を診た経験を根拠にする近藤氏の意見は、膨大な数の研究や診療結果に基づく現在のがん治療の立場からは受け入れ難いという。

## 出版入とせと

むろん医師の経験によって、治療方針が異なっても不思議ではない。人生の最後は本人が何を信じ、何を選択するかだ。

「数字」に関する記事をあと二つ。ベストセラー「『超』整理法」の野口悠紀雄さんによる「週刊新潮」の連載「世界は数字でできている!」。7月11日号では、政府の成長戦略にある目標達成期限「今後10年間で」などの数字のトリックを見透かす。10年もたてば、人は戦略のこなど忘れて検証も不可能となる。つまり「虚」の数字であると。

月刊「新潮45」(7月号)では、日本総研の藻谷浩介さんが詳細な数字を使い、アベノミクスを読み解く。例えば、金融緩和で株価は上がり続けるのか。これは世の中に出回る日本円の量と日経平均株価の過去30年の比較で否定できるという。

現代人なら、数字で明確に説明し理解する姿勢に加え、数字にだまされない嗅覚も身に付けたい。

(橋しんご・雑誌タチヨミスト)

## 数字にだまされない嗅覚



数字が鍵となっている三つの雑誌記事